ピタゴラスちゃんのジレンマ

伊吹　由

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ピタゴラスちゃんのジレンマ

【Ｎコード】
Ｎ１３６５Ｚ

【作者名】
伊吹　由

【あらすじ】
聖フィロソフィー学園・・・通称・テツ学。最近男女共学になったこの学園では、あらゆる生徒が哲学を中心に勉学に励んでいる。主人公のピタゴラスちゃんは、恋する乙女。勇気をふりしぼって、憧れの男子生徒にラブレターを届けようとするが・・・不可思議なミステリーに遭遇する。同じ倶楽部のデカルトちゃんやラッセルちゃんと共に、そのミステリーに挑むのだが・・・事態は思いがけない方向へと進んでいく。数学、物理、化学・・・全ての学問は哲学に通ず。実際の哲学論理的思考あり、哲学バトルあり、推理小説の

ような謎やどんでん返しあり・・・真実を証明するには？神は存在する？因果律とは？あらゆる哲学的要素を盛り込み、ピタゴラス達は困難に立ち向かう。そして彼女たちが行きついた先に見たものは・・・？

第1話　始まりはラブレター（前書き）

【哲学的な彼女】という企画に投稿を考えている作品です。この企画の要点は2つだと個人解釈。1つは「哲学に萌えを」（これ、企画側的には大事な点らしい）。そしてもう1つは哲学を知らない人が、「ふ～ん、哲学ってこんなものなんだ」と、入り口的な物が見える点。個人的には古代や近代あたりが好きですが、時空を超えてあらゆる世代の哲学者を登場させ、謎解きあり、哲学的論理解釈あり、バトルありという形で書いていきます。最後の最後には、多くの科学者が議論している1つのテーマを元に・・・推理的トリックを用意してますので、推理小説が好きな方は謎解きに挑戦してみてください。

第1話　始まりはラブレター

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

〜　第1話　始まりはラブレター　〜

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

3月14日。

「哲学者として、もっと成長したいから・・・
簡単には、先へ行かせないで・・・」

ピピピピピピピ・・・

「は！？」

一気に目が覚めた。鳴り響く目覚まし時計を見ると・・・午前6時。

「・・・　・・・」

なんかやけに・・・リアルな夢を見ていたような・・・？

「・・・　・・・」

目覚ましを止め、夢の内容を思い出そうとするが・・・思い出せない。

「そうだ！」

この日は、私・・・ピタゴラスにとって、大切な日。

・・・　・・・・。

いつもよりかなり早く起きた私は、午前7時前の誰もいない学園に登校した。

そして今・・・

ある靴箱の前に立っている。

「きょ、今日こそ・・・　このラブレターを・・・
　ルブラン君に・・・」

そう。私は今日、あこがれの男子生徒にラブレターを届ける。そのため、ほぼ徹夜でラブレターを書いた。1時間しか寝てないが、眠気はない。

「・・・　・・・・」

直接渡す勇気なんてない私は、定番中の定番【靴箱にラブレター作戦】を決行するというわけだ。

「・・・　・・・・」

学校の靴箱は、みな扉がついている。だからラブレターを入れて、扉を閉めちゃえば・・・誰かにそれを見られる心配はない。

「・・・　・・・・」

右手でギュッとラブレターを握りしめる・・・自分でどんな内容を書いたか、今は覚えてない。見返すと、届ける勇気が削がれちゃいそうで・・・

「こういうのは・・・勢いが大事よね。
見直しなんかせず、私が思ったありのままの・・・

愛の言葉で・・・」

ラブレターを握りしめたまま、しばらく靴箱の前でたたずむ私。この土壇場に来て・・・

トクン　トクン　・・・

心臓が高鳴り、行動を起こせない。

「このままじゃ・・・　誰か来ちゃう・・・」

髪につけたアクセサリーの三角定木を、左手で握りしめた。１：２：√３の方。

「・・・　・・・・」

３０度を握ると・・・少し落ち着きを取り戻す。

「よし！」

勇気を振り絞った私は靴箱の扉を開け、ラブレターを押し込もうと・・・

「！？」

したその時だった。靴箱の中に・・・

【ルブラン君へ】

そう書かれた手紙が1枚、入っている。

「ラ、ラブレター！？」

ハートマークのシールが貼られた、ピンクの封筒。どう見てもラブレターにしか見えないそれを見て・・・

「だ、誰が・・・？」

私は呆然とした。

（第2話へ続く）

第1話　始まりはラブレター（後書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

次回予告

謎のラブレターを手に取った私。その内容を盗み見た・・・

そしてこのラブレターを書いたのは・・・？

次回　「第2話　数学ガール？」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第２話　数学ガール？（前書き）

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。
３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、ラブレターを入れようと思ったら・・・

その靴箱の中に、何者かのラブレターが！？

第２話　数学ガール？

第2話　数学ガール？

「・・・　・・・・」

靴箱の中を覗き込みながら、私は思う。

「ありえない・・・・」

私は昨日・・・最後に学校を出た。警備の人が出入り口のカギを閉める直前まで、私は目の前の靴箱に三角定木をあてている。

ルブラン君がラブレターに気づいた時、最もインパクトを与えるため・・・

【靴箱とラブレターのサイズは、どんな【比】であるべきか？】

この問題を必死で考えていた。

「あの時は、上履きしかなかった・・・」

このラブレター、昨日はなかった。だとしたら今日・・・

「私より、早く来た人が・・・？」

リーン・・・　ゴーン・・・　カーン・・・　ゴーン・・・

7時ちょうどのチャイムが鳴り響く。

ガチャリ。

「！？」

学生用入り口が開いて、誰かがが入ってきた。

「カントちゃん・・・・」

【近代組】の彼女は、必ず同じ時間の7時ちょうどに登校してくる。

「ど・・・　・・・・」

パニクった私。靴箱の前で、あたふたとする。とりあえずカントちゃんに見えないよう、身をかがめた。

「あら～　こんな朝早く、珍しいわね～　・・・　デカちゃん」

1つ向こうの靴箱で、カントちゃんの声が聞こえる。

「ど、どうしよ・・・」

私は思いがけず・・・

「・・・　・・・・」

靴箱に入っていた、何者かのラブレターをわしづかみにした。

「・・・　・・・・」

慌てて靴箱を閉めると・・・カントちゃんに見つからないよう、足早にその場を立ち去る。

「・・・　誰が・・・？」

主のわからぬラブレターを握りしめ、自分の教室【古代組】へと走って行った。

・・・　・・・・。

教室にカバンを置いたあと、トイレへ駆け込む。誰もいない個室に入ると・・・

改めて

【ルブラン君へ】

と書かれたラブレターを凝視した。

「・・・　・・・・」

裏を見ると

【ｆｒｏｍ　Π】

そう書かれている。【Π】？　何？　なんて読むの？

「・・・　・・・・」

封を開け、中身を取り出した。中にはたった1枚、真ん中２つ折りの便せんがあるだけだ。

「・・・　・・・」

人のラブレターを盗み見る事に抵抗はあるけれど・・・

「・・・　・・・」

私はそれを広げ、読み始めた。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

愛しのルブラン君へ

毎日学園の窓から、あなたを見つめています。
もっとあなたの・・・近傍（きんぼう）に入りたい。

私の心はあなたに収束中・・・
限りなく近付いていけます。

メールアドレスを教えてくれたら・・・
毎日メーラー展開します♪

今日の放課後、校庭裏のポール公園にいます。
トイレ近くのベンチまで、来て下さい。

時間は5時１３分でどうでしょう?
私、１分前にはいておきますから。

それじゃ、放課後・・・

お会いできる事を信じて、お待ちしております。

P．S．
あなたにとって、私が十分である必要はないけれど・・・
あなたにとって必要になれれば、私は十分です。

「・・・　・・・」

そのラブレターを見て、呆然とする。

「なんて、センスのいい・・・」

そして・・・

「これならルブラン君を・・・落とせる」

心からそう思った。と、同時に確信する。

「手紙の主は・・・」

数学倶楽部の人間だ・・・間違いない。

恋敵（ライバル）は・・・

私の所属するクラブにいる。

（第3話へ続く）

第２話　数学ガール？（後書き）

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

次回予告

手紙の主は、私の所属する数学倶楽部にいる。
そう確信した私は、授業が終わった後・・・部室を探ってみた。

次回　「　第３話　数学倶楽部　」

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

第３話　数学倶楽部（前書き）

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、ラブレターを入れようと思ったら・・・すでに誰かのラブレターが入っていた。

それを盗み取った私は、こっそり中を読む。手紙の主は、私と同じ数学倶楽部に違いない。

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

第３話　数学倶楽部

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

第3話　数学倶楽部

午後3時。

最後の授業終了を告げるチャイムがなった。ショートホームルームを終えた私は、すぐに部室へと向かう。

【数】
【学】
【倶】
【楽】
【部】

部室の前にある、古びた立て看板。それを横目に勢いよくドアを開け、中に入っていった。15畳はある、まぁまぁ広い部屋。

「・・・　・・・・」

部員は結構いるはずだが、9割以上は幽霊部員。入り口に入ってすぐの壁には・・・数学倶楽部の部員が書いた、書き初めが貼られている。

【人間は、考える葦だっぴょん♪】

1番手前にあるのは、顧問であるパスカルちゃん先生の言葉だ。その横に、部員の言葉が続く。

【前に進んでるって？　嘘、嘘！】

【我思う、ゆえに我萌え～】

【万物の根源は・・・　水であるけー】

【ナマギーリ女神の、おかげです】

【ひとなみに、おごってよー】

正直言う。私はこの【ひとなみに・・・】の作品、大嫌いだ。

【神。お前はもう、死んでいる】

【余白が少なねーってば！！】

【いまいましいフレンチマドモアゼル！】

【みんなの幸福の総和が、大きくなりま】

用紙に入りきれてない。

【3，2，1！　ラッセル♪ラッセル♪】

【天ではない、地が回っているのだ！】

・・・　・・・

このような己の言葉を書道作品にしたものが、卒業生も含め５０枚ぐらいある。

【3＾2＋4＾2＝5＾2】

私は自分の作品を見ながら推理した。

「ラブレターの主は・・・

学園の窓から見つめていると言っていた。

ならば卒業生は、犯人じゃない・・・」

私は自分も含め、在校生の作品を眺める。

「ちょうど20枚。その中に犯人が・・・」

いつの間にか私は・・・　あのラブレターの主を【犯人】と呼んでいた。

部室の中をさぐり、何か犯人に繋がるものがないかを見て回る。でも・・・

「この部室。基本、紙と鉛筆と本しかないのよね・・・」

あとは、真ん中にテーブルが2つ。その周りに椅子が数脚あるだけ。本は結構あるけど、全て数学書。数冊の本を手に取り、パラパラとめくるが・・・

「・・・　・・・・」

犯人に繋がるようなものは、見つけられない。簡素な部屋ゆえ、部屋の中の捜索はすぐに終わった。

「・・・　・・・・」

犯人の手がかりは得られず、三角定木で頭をポリポリとかく。１：１：√２の方で。

キーン　コーン　カーン・・・

校内放送だ。

【昨夜、校舎の屋上に小さな隕石が落下しました。
一部、金網に破損がありましたので、現在修復中です。
修復作業が終わるまでの間、全校生徒の屋上への立ち入りを禁じます】

キーン　コーン　カーン・・・

「・・・　・・・・」

そう言えば昨日・・・何とか流星群の隕石が屋上に落ちたって、誰か言ってたな。まぁ、私は星には興味ないけどね。

そんな事思っていたら・・・

数少ない部員が入ってきた。

（第４話へ続く）

第３話　数学俱楽部（後書き）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

次回予告

部室に現れたのは、同じ数学俱楽部のデカルトちゃんとラッセルちゃん。

この日の数学俱楽部では、【集合論】を専攻しているラッセルちゃんの講義。講義の途中、４人目の人物が部室に入ってきた。

次回「第４話　デカルトちゃんとラッセルちゃん」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

第４話　デカルトちゃんとラッセルちゃん（前書き）

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

前回までのあらすじ

私、ピタゴラス。この物語の主人公。

３月１４日、早朝。憧れのルブラン君の靴箱の中に、ラブレターを入れようと思ったら・・・すでに誰かのラブレターが入っていた。

それを盗み取った私は、こっそり中を読む。手紙の主は、私と同じ数学倶楽部にいると確信し、部室を探ってみた。

でも、何も手がかりを得られず・・・

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第４話　デカルトちゃんとラッセルちゃん

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

第4話　デカルトちゃんとラッセルちゃん

部室に入って来たのは2人。

「はわ？　Pちゃん。今日、早いですね～」

私の事を【Pちゃん】と呼ぶのは、【近代組】のデカルトちゃん。

「おろ？　ピタ子。教団の集会、今日はないの？」

そして【ピタ子】と呼ぶのは、【現代組】のラッセルちゃんだ。

・・・　・・・・。

ここで簡単に・・・私から2人を紹介しておこう。まずはデカルトちゃん。【TRUTH】と書かれたバッグを持ち歩き、ポニーテールを水色のリボンで止めている。そんな彼女は・・・

校内1の遅刻魔で有名。

「無理して起きたら死んじゃうもん～」

が、口癖の基本ワガママっ子だが、何故か校内にファンクラブもあるほど人気度は高い。ついでに言うと・・・非常に疑り深い子で、何か気になる事があれば

「ない・・・　絶対とは言えないから・・・

意地悪な悪霊さんに、ダマされてるから・・・はわわ・・・」

とにかく疑えるものは疑ってかかる。【これは疑えないだろう】って事に関しては【悪霊】が登場する事になるらしいけど・・・ちょっとイタイ子？　その【悪霊】の前では、全てが疑う対象となるらしい。

「疑う事は萌え～」

未だに理解出来ないが、彼女にとって【疑う】事は【萌え】に繋がるらしい。あと正直言うけど・・・

「でもね。デカちゃん・・・
　疑ってる自分、すなわち萌え～の自分だけは・・・
　絶対いるのよね～」

自分の事を【デカちゃん】というのに、ちょっとイラッとくる。とりあえずデカルトちゃんの紹介はこの辺で。ラッセルちゃんの紹介は・・・　後でね。

・・・　・・・。

「今日もデカちゃん、遅刻しちゃいました～」

「また？　デカ子、出席日数ヤバくね？」

ラッセルちゃんは、デカルトちゃんの事を【デカ子】と言う。

「・・・　・・・」

「そうなんです～。
デカちゃん、出席日数微妙なんです～。
はわわ・・・」
1つ確かな事がある。
デカルトちゃんは犯人じゃない。手紙の主は私より早く登校し、ルブラン君の靴箱にラブレターを入れている。
あれ？　でも待ってよ・・・？
「デカルトちゃんさ～。今日の朝・・・学校来てなかった？」
「はわ？　無理して起きたら死んじゃうもん～」
出た。
「今日もデカちゃん。超遅刻です～！！」
いや、そこで胸を張られても。
「でも私・・・
朝、靴箱のところでカントちゃんが言ってたの、聞いたわ・・・
【こんな朝早く、珍しいわね。デカちゃん】って・・・」
確か・・・そう言ってたわよね？

「デカちゃん、今日起きたの・・・・12時ちょうどです～。
学校来たのは、お昼の2時ですから～」

今、3時過ぎだけど・・・・　何しに学校来たんだ、この子？

「あのさ・・・・　僕の推理が正しければ・・・・」

ラッセルちゃんは、自分自身の事を【僕】と言う。

「多分、僕と同じクラスのハイデガーちゃんの事だと思うよ。
彼女、【デガちゃん】って呼ばれてるし」

なるほど。

「そうか～・・・・　私の聞き間違えね。
デカちゃんじゃなくて、デガちゃんだったのね・・・・」

まぁおかげで・・・・

朝が苦手なデカルトちゃんは、真っ先に犯人候補から除外された。

一方、ラッセルちゃんは・・・・

「さぁ、今日は昨日の続き・・・・僕が集合論の基礎、教えるからね～」

あの手紙の主の可能性はあるのだろうか？

・・・・　・・・・。

では、ここでラッセルちゃんの紹介。

何を隠そう、数学倶楽部の部長。ミニスカ＋ヘソ出しルック・・・ちょっと時代遅れな感はあるが、ツインテールの元気な女の子。かの天才アインシュタインちゃんとも仲が良く、校内でも随一と言われるほど豊富な知識を持っている。

部長は集合論を研究してるらしく・・・ここ最近の数学倶楽部では、毎日部員相手に集合の話をしてくれている。もっともそれを聞くのは、私とデカルトちゃんの2人だけ。あとは幽霊部員だし。

いっけんしっかりものの部長だが・・・まぁ、その本性は次のエピソードで解る事になるでしょう。

・・・　・・・。

「はわわ～　昨日の【空集合】は難しかったです～」

「集合論はロジックとも密接につながってるんだから。
デカ子、論理的に【神の存在】を証明したいんでしょ？

じゃ～、ちゃんと学ばなきゃダメよね～」

集合論を学ぶ事は、哲学を学ぶ上でとても大事だと部長は言う。私達にゲーデルちゃんの【不完全性定理】まで教えると言っているんだけど・・・正直難しいのよね、集合論。でもこれらを学ぶ事は、哲学的にも大きな意義があるんだって。

私は哲学者として成長したいから・・・難しくても頑張って勉強す

る！

ちなみにこの【集合論】は数学の世界でも割と新しい研究分野らしく、聖フィロソフィー学園の中でも【現代組】の子達しか学んでいない。

果たして【古代組】の私と、【近代組】のデカルトちゃんに理解出来るのかしら？

昨日の部長の講義で、【部分集合】と【空集合】について学んだ私達。

「昨日習った・・・

【空集合は、全ての集合の部分集合になる】。

私も、そこがよくわからなかったわ」

空集合というのは、中身が空っぽの集合の事なんだけど・・・そんな集合考えて、意味あるのかしら？

まず【xが集合Aに属する　→　xは集合Bに属する】が成り立つとき、AはBの部分集合という。

例えば、

A＝｛1，2，3，6｝

B＝｛1，2，3，4，6，12｝

という2つの集合の場合、xがAに属している（この場合、xは1，2，3，6のどれかになる）ならば、そのxはBに属している。だから、AはBの部分集合なのだ。

「それはわかるんだけど・・・」

【空集合は、全ての集合の部分集合になる】と部長は言う。

「だったら・・・

【ｘが空集合に属するならば、ｘは全ての集合にも属する】・・・

それが成り立つって事よね？」

「そだよ」

即答する部長。

「でも、空集合って・・・中身空っぽなんだからさ・・・

ｘが空集合に属するって・・・　おかしくない？」

「デカちゃんも、そこ・・・よく、わからなかったです～」

「ＯＫ。じゃぁ、今日は集合とからめて、論理の基礎を教えよう～」

私達はテーブルの周りに座った。

「まずは・・・

【デカ子がテストで１００点とったならば、僕がケーキおごる】

って、命題あったとするわよ？」

命題というのは【正しい】か【正しくない】かが、ハッキリとしている文章や数式の事。

あらゆる真理探求命題の真偽を議論するのも哲学の１つ。例えば命題【神はいる】とかね。

あ！　勘違いしないでよ。命題【神はいる】ってのは【神がいる】事を、必ずしも言ってるわけじゃないの。命題ってのは【正しくない】とハッキリわかってる事に対しても言うんだ。だから【２＋３＝１００】のように、完璧間違っている事も立派な命題なのだ。

一応私達の認識では【神はいる】か【神はいない】かの２択でしょ？なので神がいても、いなくても・・・【神はいる】は命題の１つなの。

【デカ子がテストで１００点とったならば、僕がケーキおごる】

部長は紙にその命題を書き、テーブルの真ん中に置く。

「デカちゃん、ケーキ、大好きです～」

「いや、例えだから・・・で？　部長、続きを」

「ケース１。

デカ子が１００点とった。そして僕がケーキおごった。

この時この命題は・・・正しい？　正しくない？」

「それは正しいです～　１００点とったんだから～
デカちゃんがケーキごちそうになるのは、当然です～」

「ま・・・　疑う余地はない。正しい」

「正解。じゃぁ、ケース２。
デカ子が１００点とったのに・・・僕がケーキをおごらなかった。

この場合、この命題は正しい？」

「それは間違ってます～」

「うん。１００点とったらケーキおごるんだから・・・
１００点とったのに、おごらないのはおかしい！！

だからこの時、命題は・・・正しくない！！」

「ＯＫ！　ではケース３。
デカ子が１００点とらなかったので・・・僕はケーキをおごらなかった。

この時、命題は正しい？」

「正しいです～」

「うん、私も正しいと思う。
１００点取れてないから・・・ケーキもらえないのは当然」

「よし！　今のトコ、全て正解・・・ではラスト！　ケース４！

デカ子が１００点とれなかったのに・・・　僕はケーキをおごった。

この時、命題は正しい？　正しくない？」

「これは・・・正しくないです～」

「私も正しくないと思う」

ガラリ！！

その時・・・部室に入ってくる人物がいた。見覚えのない顔・・・誰？

「ラ・・・ラマヌジャンちゃん！？」

部長が裏返った声をあげる。ラマヌジャンちゃん？

「あら・・・ラッセルちゃん」

名前、聞いたことある。確か部長と同じ、【現代組】の子だ。肩まで伸びた真っ黒な黒髪と、大きなクリッとした黒い目。見た目からして、インド出身だろう。何となく、神秘的な魅力がある。

「な・・・　何故、ここへ？」

そして数学倶楽部の・・・幽霊部員の１人でもある。

「ただ・・・　私の本を取りに来ただけ・・・」

【デカ子がテストで１００点とったならば、僕がケーキおごる】

「・・・　・・・・」

ラマヌジャンちゃんが、部長の書いた命題をじっと見つめた。

「あ、デカルトちゃんが１００点取らなかった時にね・・・
部長がケーキをおごったら・・・この命題は正しいかって話をしてたの。

私とデカルトちゃんは、正しくないって思うんだけど・・・」

「絶対正しくないです～」

命題は正しくないという私とデカルトちゃんに対し・・・ラマヌジャンちゃんは、首を横に振ってこう告げた。

「それ・・・　正しいわよ・・・」

「え？　嘘・・・」

「はわ？」

思わず声をあげる私達。

「何で・・・？　１００点取ったらケーキおごってもらえるなら・・・

・

１００点取らなかったら、おごってもらえないでしょ？

なんでこの命題が・・・その時、正しいって言えるの？」

「わかるの。ナマギーリ女神のおかげで・・・・」

「え？」

「はわ？」

そう言うとラマヌジャンちゃんは、ニッコリと優しい笑顔を見せる。

いや・・・笑顔はステキだけど・・・　な、何？ナマギーリが何とかって？

部屋の奥の方へ行ったラマヌジャンちゃんは、数冊の本を手に取ると・・・

「それじゃ・・・私はこれで・・・」

そのまま笑顔で、部室を出て行った。

「・・・・　・・・・」

「はわわ～　・・・・」

彼女が出て行く姿を呆然と見つめていた私達。

「なんだか・・・　不思議な子ね・・・」

閉じた扉を見ながら、私は呟いた。

「まぁ・・・　天才と何とかは、紙一重らしいからね。
僕にもあの子は・・・イマイチわかんないだよね～」
そう言えば、ラマヌジャンちゃんは・・・かなりの天才肌だって聞いた事ある。
「はわわ～　でも、ホントにラマヌジャンちゃんの言う通り～
デカちゃん１００点とらなかったのに、ケーキをおごってもらうって・・・
この命題が正しい事になるんですか～？」
「私も・・・信じられない・・・」
半信半疑の私達に、部長はきっぱりと言う。
「うん。正しい」
え！？　ホントに！？
「論理の世界では正しいんだ。こう考えるといい。
例えばデカ子が９９点取った。そこで僕はこう言う。
【１００点じゃないが、よく頑張った！　だからケーキをおごろう！】
どう？　そういう成り行き、割と自然じゃない？」
「自然です～　ケーキ、欲しいです～」
「う～ん・・・　それは自然に思えるけど・・・」

「いい？
【デカ子がテストで１００点とったならば・・・】という命題。
これは１００点をとった時の事を言ってるだけで・・・」
「うん・・・」
「１００点を取れなかった時の事は一切言ってない。
デカ子が１００点取れなかった時・・・
僕がケーキおごっても、この命題を否定しいてる事にはならないの」
「なるほどです～　デカちゃん、わかったです～」
「・・・　・・・」
デカルトちゃんは納得してるようだけど・・・私は・・・
「結論。【pならばq】という命題を考える場合・・・
前提pが正しくないとき、qが正しくても正しくなくても・・・・
命題【pならばq】は、正しい事になるのよ！」

p	q	p→q
T	T	T
F	F	F

Ｆ　Ｔ
Ｆ　Ｆ　Ｔ

部長はこんな表を書いた。

「これ、真理値(しんりち)表って言うんだ。
Ｔは【ＴＲＵＴＨ】で、【真】って意味ね」

「デカちゃんのバッグにも、【ＴＲＵＴＨ】って書かれています～」

「そうそう。まさにそれ！　【真実】とか【正しい】って意味。
Ｆは【ＦＡＬＳＥ】。もちろん【偽】【正しくない】って意味ね」

「う～ん・・・」

しかめっ面の私。

「はわわ～。確かに【ｐ】が【偽】の時、【ｐ→ｑ】は２つとも【真】です～」

「だから
【ｘが空集合に属するならば、ｘはどの集合にも属する】ってのはさ・・・

前提の【ｘが空集合に属する】がすでに間違ってるから・・・
この命題自体は正しい事になる！」

「むむむ・・・」

まだ微妙な理解の私。

「ゆえに【空集合は全ての集合の部分集合である】ってわけ！
ん～。 Q．E．D．ね」

「デカちゃん、わかったです～」

「う、う～ん・・・」

論理は難しい。

こうして・・・

この日の部長による【集合論講義】は終わった。何となく解ったような、解らなかったような・・・

「ピタ子さぁ、今日もブラジャーつけてるよね？」

講義を終えた部長が、私に声をかけてきた。

「え？」

さっきも言ったけど、私の事を【ピタ子】と呼ぶんだけど・・・

「デカ子のブラジャーは認めるけどさ～」

デカルトちゃんは【デカ子】と呼ぶわけで。

「・・・　・・・」

つい、自分の胸を覗き込んだ私。明らかに・・・

胸の大きさで【デカ子】【ピタ子】と呼んでいる。失礼な！

ここだけの話、ラッセルちゃんの胸は・・・

ペッタンコだ。

「僕、思うんだけどさ。ピタ子に・・・ブラ、必要ないよ？」

胸がつるぺたで、自分を【僕】と称するので・・・時々、男の子に間違えられる部長。本人は男の子と間違えられる事をすごく嫌うので、そこをイジったりはしないんだけど・・・

「あのね、部長。前も言ったけど・・・

私・・・こう見えても、Ｂはあるんだから・・・」

思わずそう言ってしまった私。だってラッセルちゃんよりは胸あるのよ！これは真実！！

「こう見えても？　見えてないけど？」

出た。この言い方は彼女の作戦の１つ。

「ぐ・・・　だ、だからそれは・・・　例えであって・・・」

わかってはいるんだけど・・・

「ピタ子、【見えても】と仮定しているのに・・・

見せないって事？」

いつも、ラッセルちゃんの術中にハマってしまう私。

「そ・・・それは・・・　そうよ・・・」

「見せないんならさ・・・

【こう見えても、私はHカップ】とでも言えるじゃん！」

なんていうか・・・　人の揚げ足をとるのが絶妙なよ、部長は。

「そ・・・　そりゃ、そうだけど・・・」

「つまり本当はAでも、Hだと言う事が出来る・・・

見せないこと前提なら・・・何でもありじゃん！」

「う・・・」

言い返せない私。後で知る事になるんだけど・・・これは昔の哲学者の常套手段、【詭弁（きべん）】というものらしい。

「結局はさ。ブラを脱ごうとしないってわけよね？」

「う・・・」

始まった。

ラッセルちゃんは・・・1年前、通称【ブラパラ事件】を起こした張本人。いわゆる【ブラジャー・パラドックス事件】。この事件は、彼女の集合論的パラドックスの追求による結果起きたらしいんだけど・・・

説明すると話が長くなるので、この事件の詳細は【番外編?】に預ける。

「きょ、今日はスポーツブラだから・・・」

「え～・・・　ハズし甲斐ない～。なっせる～」

なっせる?

明らかにテンション下がった部長はちょっと落ち込んだ後、私を見た。いや・・・私の胸を見た。

「じゃぁ、スポブラの先に豆つけたら?
　おっぱい、大きく見えてセクシーになるよ！　」

私が豆、大嫌いなのを知ってて言ってる。ここでカッとなったら、またさっきの繰り返しだ。

「豆つけたら・・・ラッセル、ラッセル～♪」

とにかく彼女は下ネタが大好き。あと、オヤジギャグも。てか、中身はただの【エロセクハラ中年オヤジ】だと断言していい。

数学や哲学やってる時は超真面目なんだけどな～。

「・・・　・・・・」

私は思う。このエロオヤジが、あんなセンスのいいラブレターを書いたなんて・・・まず、ありえない。そうとなれば・・・

「ねぇ。あなた達・・・」

私はテーブルの上に・・・

「ちょっとコレ・・・見てくれる？」

あのラブレターを置いた。ひと癖もふた癖もある連中だが・・・

「はわ？」

「何？」

この数学倶楽部で、数少ない毎日顔を見せる部員。

「コレ、誰が書いたか・・・わかるかな？」

そして、頭はキレる子達だ。

「はわ？　ラブレター？　いやいや・・・
これがラブレターとは・・・簡単には信じないです～
何かの罰ゲームの可能性もあります～・・・」

私は中から便せんを取り出し・・・それも広げて見せた。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

愛しのルブラン君へ

毎日学園の窓から、あなたを見つめています。
もっとあなたの・・・近傍（きんぼう）に入りたい。

私の心はあなたに収束中・・・
限りなく近付いていけます。

メールアドレスを教えてくれたら・・・
毎日メーラー展開します♪

今日の放課後、校庭裏のポール公園にいます。
トイレ近くのベンチまで、来て下さい。

時間は5時13分でどうでしょう？
私、1分前にはいておきますから。

それじゃ、放課後・・・
お会いできる事を信じて、お待ちしております。

P．S．
あなたにとって、私が十分である必要はないけれど・・・
あなたにとって必要になれれば、私は十分です。

～～～

部長のギャグには、センスのかけらもない。

「玄関の前で、コレ落ちてるの見つけてさ・・・」

私は嘘をつく。愛のためなら、嘘だって平気。

「落とし主に、返してあげたいんだけど・・・」

これも嘘。私以外に誰がルブラン君を狙ってるから知りたいだけ。

「だからコレ・・・誰が書いたと思う？」

こうして・・・数学倶楽部に所属する私・ピタゴラスと・・・

「デカちゃん的には～　まずは部員、全員を疑ってみる！

手紙の主は・・・

あなたよ！Pちゃん！」

朝が弱く、疑り深いデカルトちゃん。そして・・・

「僕が犯人？　ち！　バレちゃ～しょうがない・・・

どうせ有罪は確定だ。それならば・・・

お前のブラを頂く！」

私のド下手な物真似をする部長。すなわちエロオヤジのラッセルちゃんの3人で・・・

「おら！　デカ子！　僕にお豆を見せなさい～」

「はわわ～（笑）」

このラブレターの主を探し出し・・・

「あまいわ！　ラッセルちゃん！

デカちゃんが、女の子と信じているようだけど・・・

果たして真実かしら！？」

そしてその子が【犯人】である事を証明するため・・・

「そんなの・・・ブラを頂けば、解ること！」

「それはどうかしら！？　仮におっぱいがあったとしても・・・

意地悪な亡霊さんに、ダマされてないかしら！？」

動き始めた・・・

のか？

（第５話へ続く）

第４話　デカルトちゃんとラッセルちゃん（後書き）

〜〜〜

番外編？　ブラジャー・パラドックス事件（前書き）

～～～

番外編？　ブラジャー・パラドックス事件

今から約1年前・・・

その事件は起こった。

【現代組】所属のラッセルちゃん。昔から自分より胸が大きい子を見ると、ブラジャーをハズしたくなる衝動に駆られる子だった（これは本人も認めている）。

ある日彼女は

【自ら(みずか)ブラを脱ごうとしない子から、強引にブラをはぎ取る僕】

の存在について考えてみたらしい。そして、本人曰く

「僕も【自らブラを脱ごうとしない子の集合】に属している」

との事。そうすると、どういう事が起こるか？

「僕はブラを脱ごうとしない女の子から、強引にブラをはぎ取るから・・・

自らブラを脱ごうとしない僕自身の、ブラもはぎ取らなければいけない。

でも、そうすると・・・自らブラを脱いでいる事になってしまい・・・

まさにパラドキシカル！！」

自己存在のパラドックスに直面した彼女は興奮し、あろうことか・・・

【自ら(みずか)ブラを脱ごうとしない子から、強引にブラをはぎ取る僕】

を【実践】する事を決意。本人曰く、それも立派な哲学的実践だと・・・？

とはいえ、そのためにやるべき事といえば・・・

明(あきら)かだ。

最初の犠牲者は、同じクラスのカントールちゃんだった。ラッセルちゃんは彼女に・・・

「ねぇ、ブラとって」

と言った。

「は？　何言ってんの？　嫌に決まってるじゃん！」

というカントールちゃんの返しに対し・・・

「ふ・・・　自らブラを脱ごうとしないわけね・・・」

ニヤリと笑ったラッセルちゃん。カントールちゃんの背中に忍び寄り・・・

「3！」

彼女のブラホックを、一瞬でハズしたかと思うと・・・

「2！」

まるでマジックのように、ブラジャーをはぎ取った。

「1！」

目撃者の証言によると、ラッセルちゃんは奪い取ったブラを高々と持ち上げ・・・

「ラッセル、ラッセル～♪」

と、勝利の雄叫びをあげていたそうだ。

「これで私は、パラドキシカル！　ラッセル、ラッセル～♪」

ついでに彼女は・・・どんなブラも、3ステップでハズせると豪語している。そんなスキル、人生で有用か？

こうして・・・

彼女自身、パラドキシカルな存在になりたいがため・・・

クラス中の女の子を巻き込んだ【ブラジャー・パラドックス事件】、通称【ブラパラ事件】が勃発。

この事態を収拾しようと動いたのが、同じクラスの学級委員長・ヒルベルトちゃん。

「は？　ブラはずせ？　あなた、気は確か？
そんなクラスの秩序を乱す生徒の言う事が聞けるとでも？」
矛盾のない完全なクラス体系（システム）作りを目指していた彼女も・・・
「自らブラをハズす気・・・無いわけね・・・」
「当たり前でしょ！　完全な・・・」
「3！　2！　1！」
言わずもがな。2人目の犠牲者となった。
「ラッセル♪　ラッセル～♪」
そしてクラスの女子達は、次次とラッセルちゃんの毒牙にかかる。
「ブラとって！」
の要求に対し
「いや！」
と言う女子のブラをはぎとっては
「ラッセル♪　ラッセル～♪」
勝利宣言と同時に、ブラを高々と持ち上げる。パラドックス以前に、もはやただの変態だ。

「ブラとって！」

このラッセルちゃんの理不尽な要求に・・・

「いいわよ」

唯一「Ｙｅｓ」と言ったのが、ラマヌジャンちゃん。彼女・・・論理は通じないが、超のつく天才肌で、あらゆる公式を見つけるのが得意な子らしい（ラッセルちゃん情報）。

「じゃぁ、取るね」

というラマヌジャンちゃんに対し

「あ！　待って！　いい！　あんたじゃ、パラドキシカルに反する！！」

初めてうろたえたラッセルちゃん。矛盾に反するというのも、変な話だけど？

こうして・・・

ラマヌジャンちゃんを除く【現代組】の女子全て・・・ラッセルちゃんの犠牲になった。

「ラッセル　ラッセル～♪」

やがて【現代組】の女の子達だけでは飽きたらず・・・他のクラスの女の子を標的にし始める。

【古代組】に侵入したこのテロリスト・・・いや、エロリストは・・・

私と相対(あいたい)した。

「・・・　・・・」

ラッセルちゃんは私の胸をじっと見つめた後、こう言った。

「ブラ、必要？」

これがラッセルちゃんにかけられた、最初の言葉。

「は！？　Cあるから！！」

そしてこれが私からラッセルちゃんにかけた、最初の言葉。

「C？」

「あ・・・　ホントは、B・・・　プラス・・・
Bプラスよ！　四捨五入してCよ！！」

「Bプラス？　それ以前にさ・・・　おっぱいに、四捨五入ってあるの？
言うなれば、四捨五乳ってか？　ラッセル、ラッセル～♪」

（「な、何よ・・・　この子？　人のおっぱいをネタにして・・・」）

ラッセルちゃんの目がキラリンと光ったかと思うと・・・

「ぶっちゃけ言うけどさ・・・　Aでしょ？」

自信満々でそう言ってきた。

「は！？　Bあるし！！」

「じゃぁ、ブラとってよ・・・」

「はぁ！？　頭おかしいんじゃないの？
なんで、ブラとる必要があるわけ？」

「ふむ・・・じゃぁ、あなた・・・」

この当時はお互い名前も知らない。

「自ら、ブラを取ろうとしないわけね？」

「あ・・・当たり前でしょ！？
あんただって、ブラ取りなさいって言われたら・・・
取らないでしょ！？」

「うん♪」

あの時の嬉しそうなラッセルちゃんの顔は・・・忘れたくても忘れられない。嫌な意味でね。

「3・・・」

「？」

ラッセルちゃんは、突如・・・

「2・・・」

カウントダウンを始めたかと思うと、私の背後に忍び寄り・・・

「1！　ラッセル♪　ラッセル～♪」

瞬殺でブラホックをはずし、ブラジャーをはぎ取った。

「き・・・　きゃ～！！」

この後、どうなったかって？

私の口から言いたくないし、言えるわけがない。それは読者の想像に任せる事にしておく。

・・・　・・・。

事件から数日後。私は数学倶楽部に入部するため、部室を訪れた。

そこでラッセルちゃんと再会する。

「お？　古代組の・・・　えっと・・・」

彼女は私の胸を見て、何かを思い出した。

「そうだ！　ピタ子！　【古代組】のピタ子だ！！
正真正銘のピタ子だ！」

いや・・・　そんなピタ子ピタ子、言わなくても・・・

「・・・　・・・・」

あんただって、胸ピッタコンじゃん。私は失礼かなと思って、触れないでいるのに。

「すでに証明済みだもんね～。ラッセル♪　ラッセル～♪」

このセリフから、ブラをハズされた後の事を・・・少し想像できるだろう。

前述したけど、ラッセルちゃんはつるぺたぴったんこ・・・学校1の貧乳だ。

【自分より胸が大きい子のブラをハズす】Π【学校1の貧乳】＝【無差別エロ】

※　【Π】は、【かつ】と読む。

この命題における等式は、【現代組】で【ラッセルの法則】とよばれている。【ド・モルガンの法則】よりも明かで、本人以外周知の公式なんだって。まぁ、集合論は【現代組】しか習っていないから、

私にはあまりわからないけど。

そんなつるぺたぴったんこののラッセルちゃんに・・・

「ラッセルちゃんこそ、間違いなくブラいらないから」

なんて言おうものなら・・・

「あなたこそ、ブラ、必要なの？」

となり、あの事件の繰り返しになってしまう。そんなラッセルちゃんが・・・

数学倶楽部の部長だったのには驚いた。

「僕、集合好きだから」

意味不明な動機で、自ら部長に立候補したらしい。基本、数学倶楽部の人間は・・・自分にしか興味がない。倶楽部会議で集合に興味あるという彼女以外、立候補する人も推薦される人もいなかったらしい。

「じゃ。僕、部長ね♪　ラッセル、ラッセル～♪」

こうして我が聖フィロソフィー学園、数学倶楽部の部長に・・・

「集合に必要なのは・・・エレメント！

ん～、何かエロい【ひ】【び】【き】！」

エロオヤジが就任したというわけだ。

人のブラをハズすのが趣味・・・そんな子が上の立場に立つなんて、どんな混乱を招くだろう。

そう思っていた私だが・・・

現代組のラッセルちゃん。彼女こそ部長にふさわしい・・・

だんだんそう思うようになってくるから不思議。それはこの小説を読んでもらえれば・・・みんなわかってくれるだろう。

そしてもう1つ。

後に私は・・・

このラッセルちゃんの【驚くべき事実】を知る事になる。

（第5話へ続く）

番外編？　ブラジャー・パラドックス事件（後書き）

～～～

第5話　パイからの手紙（前書き）

～～～

第5話　パイからの手紙

「やっぱり・・・　まず、コレからよね」
ラブレターを裏返す私。
【ｆｒｏｍ　Π】
「これ・・・フロム何？　何かの記号？」
私の質問に、２人は即答してくれた。
「はい！　デカちゃん、わかります～！
これは円周率のパイです～！」
「そうそう。おっぱいの【Π】（パイ）ね」
とりあえず部長は無視したいが・・・
「パイ？　パイって、【π】じゃなかったっけ？」
「それ小文字よ。大文字で【Π】って書くの。
ピタ子・・・ホント、無理数とか苦手よね～」
現代組の部長の知識は、犯人捜索に欠かせない。
「仕方ないでしょ！　【古代組】では無理数、教わらないんだから！」

「そういえばピタ子。無理数の質問しにきた、教団の弟子・・・
半殺しにしたってホント？　すっごい噂になってたよ？」

「あ！　その話！　デカちゃんのクラスでも話題なってました～」

「・・・　・・・・」

「いくら自分が無理数わからないからってさ。
弟子を半殺しにするってのは・・・僕はどうかと・・・・」

「あ、あれは私じゃない！　私のとりまきが勝手に・・・
【禁忌（タブー）に触れし者、制裁あれ】とか言ってさ・・・

その子を校庭裏の川に投げ込んだのよ。
私は一切、関与してないから！」

ここで【ピタゴラス教団】について説明しておこう。いわゆる私のファンクラブで、何故か私は【教祖様】と呼ばれている。そしてファン連中は自らを【弟子】と称し、ぶっちゃけストーカー並に盲信というか、妄信するコアな連中が多い。

デカルトちゃんのファンクラブとは違い・・・私の教団は一歩間違えれば、犯罪者になりそうな子ばかり。【万物は数なり】【ピタゴラスの定理】【豆禁】が教団の３大キャッチコピーになっているらしい（私は関知していない）。

弟子になって日の浅い子は・・・熱心なのはいいけど、私が苦手な無理数に関する質問をする時がある。そんな時、これまた熱心な先輩弟子が・・・質問した子を校庭裏の川に投げ込むのが慣例だ。

先にも言ったが、私は豆が大嫌い。死ぬほど嫌い。死ねばいいのに。
そんな私に、新人弟子が【納豆】を差し入れた事があった。
「僕が聞いた話じゃ、納豆差し入れた子をさ・・・
半殺しどころか、全殺しにしたって聞いたわよ」
「・・・　・・・」
ノーコメント。
「豆、体にもよくて美味しいのに～。
デカちゃん、豆、大好きだけどな～」
「僕もお豆、大好き～」
部長が言うと、エロにしか聞こえない。
【ｆｒｏｍ　Π】
「話(はなし)を戻しましょう。じゃぁ、これは・・・パイからの手紙？」
「ん～・・・　僕には、インターセクションに見えるな」
「インターセクション？」
「そ。２つの集合の共通部分。交わりって事。
僕、一昨日教えたじゃん。
ホントは【Ｕ】をひっくり返した感じなんだけど・・・」

う～ん。【U】を逆さまにして【Π】か。まぁ、見えなくはない。

「デカちゃん。共通部分の事、忘れたです～」

「教えたばかりなのに・・・　デカ子、もう忘れた？」

ここ最近、部長が講義してくれている【集合論】。一昨日は【共通部分】と【和集合】の話も出た。

例えば、

A＝｛2，3，5，7｝

B＝｛1，3，5，7，9｝

という2つの集合があった場合、どちらの集合にも属する要素の集合を、AとBの【共通部分（インターセクション）】といい、AΠBで表す。

AΠB＝｛3，5，7｝

ってわけ。ちなみにどちらかに属している要素を集めた集合は【和集合（ユニオン）】といい、AUBで表す。

AUB＝｛1，2，3，5，7，9｝

というわけだ。部長曰く、集合論で【共通部分】【和集合】は基本中の基本との事。

「インターセクションか・・・

ルブラン君と、交わりたいって意味じゃね？」

部長のエロトークはおいといて・・・

「顧問に聞いてみようかな？」

顧問なら部員のことをよくわかるはず。このラブレター見せたら、一発で手紙の主を特定しくれるはず。我ながらいいアイディア。早速・・・

「デカちゃん、思うんですけど～
顧問に頼るのは～　多分ダメです～」

ところがデカルトちゃん、私の意見にダメだしする。

「顧問のパスカルちゃんは～
学校終わったらすぐパチンコ屋行くです～」

パチンコ屋？

「そういえば僕、日曜日にパスカルちゃん見たよ。
赤鉛筆耳にかけて、競馬新聞を凝視してた」

競馬？

「その新聞の裏側にさ・・・裸の女の人も載ってて興奮したわ～
ラッセル～　ラッセル～♪」

「デカちゃんの担任ですけど～・・・」

そう。数学倶楽部顧問のパスカルちゃんは、【近代組】の担任でも

ある。

「放課後～　担任、見かけた事無いです～」

「でも授業だけは上手よね、あの先生。
僕、確率論の授業受けた時さ・・・

わかりやすくて、けっこう感動したわ」

「えぇ？　デカちゃん、しょっちゅう怒られるです～。
【お前、空しいよな】【お前の哲学、浅いんだよ】って～・・・」

「【古代組】の授業では、なんか変な事言ってたな～。
【結婚＝殺人】が成り立つとか・・・」

「あー！　それ、言ってた！　僕も聞いた！」

井戸端会議になりかけたが、話を総合すると・・・どうやらは顧問はギャンブル好きらしく、授業が終わるとすぐにパチンコ屋か競馬場に出向くらしい。

「ふむ。パスカルちゃんに頼る作戦は・・・　無しね」

「無しです～！」

「ナッセル！」

なっせる？　こうして顧問経由の犯人捜索は、全会一致で否決された。

「どうやって手紙の主を見つければ・・・
他に何か手がかりないかしら・・・？」
部長が手を挙げた。
「容疑者の人数は、有限なんだからさ～。
しらみつぶしに、部員全員あたればいいんじゃない？
【あなた、ラブレター落としませんでした？】ってさ」
自信満々で言いあげたものの・・・
「でもほとんどの部員・・・学校終わったら、散らばるのよね～」
部室に顔出すのは、私達3人ぐらい。他の部員は、基本幽霊。たまに顔見せても、すぐどっか行っちゃう。
「う～ん、確かに。僕達は、毎日ここ来るけど・・・
帰宅部員を始め、他の部員がどこにいるか把握できないな～」
かといって、休み時間に各クラス回るのも・・・
「【古代組】【中世組】【近代組】【現代組】【東洋組】の5クラス。
部員は、全てのクラスに散らばってるし。
1つ1つ回るのも、けっこうめんどくさいわよ？」
「デカちゃん、めんどくさいの嫌いです～」

「あ、僕もめんどくさいのダメ。はい、ナッセル！」
なっせる？
「は～い！」
今度はデカルトちゃんが手を挙げる。
「はい、どうぞ」
あまり期待せずに、彼女に発言権を与えた。
「5時過ぎにポール公園行けばいいと思います～」
「あ・・・」
「あ・・・」
部長と同時に声を上げる私。何故、気づかなかったんだろう？
時計を見ると午後4時過ぎ。学校から公園までは、10分もあれば行ける距離だ。
「デカルトちゃん・・・　あなたの言う通りだわ。
手紙の主は・・・
ポール公園、トイレ近くのベンチに座っているはず・・・」
「デカ子！　冴えてるじゃん！
ご褒美に・・・ラッセル、ラッセル♪」

「きゃ～！！」

また始まった・・・。

私は2人を部室に残し、部屋を出ようとする。

プチン♪

「　！？　」

瞬間、ブラホックがハズれる感覚を味わった。

「ふふ・・・スポーツブラなんて嘘ね。僕にはお見通しさ！」

酔っぱらって気分が高揚すると、キスをしたくなるオヤジがいると聞くが・・・

「【ブラを脱ごうとしない子のブラを、強引にはぎ取る女の子】
　この命題のパラドックスに・・・　いざ、挑まん！」

部長は気分が高まると、人様のブラをハズしたくなる・・・結局エロセクハラオヤジってわけだ。

「ラッセル♪　ラッセル～♪」

「ちょ・・・　」

この変態のせいで・・・　無駄な時間を過ごしたのは言うまでもない。

（第６話へ続く）

第5話　パイからの手紙（後書き）

～～～

第6話　ソーカルちゃんと理事長（前書き）

～～～

第6話　ソーカルちゃんと理事長

バタン！！

「あ・・・」

部室を出た私は、出会い頭に誰かとぶつかり・・・

ドスン

その場で倒れてしまった。

「いてて・・・」

お尻をさすりながら前を見ると、ぶつかった相手も尻餅をついている。

「2分の1mvの2乗が、帰納的に分子間力によって引き裂かれ・・・」

「？」

その子の洋服には、色々な数式や化学記号がプリントされていた。

「ご、ごめんなさい・・・」

前を見ず部室を出た私・・・明らかに私の不注意でぶつかったので、素直に謝るが・・・

「ユークリッド空間なら・・・カノンコードで調和がとれるけど・・・
もし、遠近法によるミスディレクションの世界なら・・・？」
その子は、ニヤニヤしながら私に語りかける。
「は？」
首をかしげる私。
「オールトの雲の中で見たわ。
垂直落下式・・・　クローズドインターバルによるタイムトラベルを・・・」
「ちょ、ちょ・・・　あなた、大丈夫？」
絶対、この子・・・
「エントロピーが増大すると、ジュール熱によるガンマ線の波長が・・・」
打ち所が悪かったんだ。
「おろ？　ソーカルちゃん・・・」
私に続いて、部室を出てきた部長。私がぶつかった相手に、手を差し出した。
「・・・　・・・・」

その子は部長の手を握り、ゆっくりと立ち上がる。

「1／f揺らぎってあるでしょ？
　ベジタリアンの世界じゃ、ヴァンデグラフにG難度なの」

立ち上がると、ニヤニヤの視線をラッセルちゃんに向け・・・さらに語り始めた。

「ロンゴロンゴ文字で、コックリさんやるとさ・・・
　4コマ滑りのディアミドフから逆転してヒーリーを得られるから！」

「はいはい。わかった、わかった・・・」

ラッセルちゃんは、その子の背中を押し・・・

「相対性理論も、アウトオブプレイスアーティファクツも・・・
　フラクタル音階で、現在完了なの」

「ほら。【物理倶楽部】は、隣・・・」

隣の部屋へ押し込む。

「私！！　あなたのドッペルゲンガーを見たわ！！」

押し込まれたその子は、私を指さしてそう言った。直後・・・

「じゃ、また明日ね。ソーカルちゃん」

バタン！

部長が物理倶楽部の扉を閉める。

「ふ～・・・」

やれやれという表情を浮かべる部長。幸いにも、その子が再び私達の前に現れることはなかった。

「ソーカル・・・ちゃん？」

「うん。僕と同じクラス。【現代組】のね・・・」

「デカちゃん、聞いた事あります～」

ラッセルちゃんの後ろからひょっこり現れたデカルトちゃん。

「デカちゃんが聞いた話では～　早口言葉で専門用語を言って～校内意見発表会で最優秀賞とったんです～。

でも授賞式で【全部嘘ぴょーん】って、笑い飛ばしたって聞いてます～」

「お？　デカ子、よく知ってるね～。

【ソーカル事件】って、ヤツだね」

「ソーカル・・・事件？」

「まぁ、クラスでもかなり変な子だからさ。

あまり気にしない方がいいよ。さ、公園行こ」

【現代組】って所は部長を始め・・・

「うん・・・」

変人の集まりらしい。

「数学倶楽部のメンバーで外へ行くのって、初めてかも～。
デカちゃん、ドキドキです～」

「お？　ドキドキしてる？　どれどれ・・・
ちょっとブラジャーハズして、お胸を・・・」

「きゃ～♪」

また始まった・・・。

「これ！」

不意に男性の透き通るようなテノール声が、私達にかけられた。

「あ・・・」

物理倶楽部の前にたたずむ、スーツ姿のダンディなおじさん。少し白髪が目立つ巻き毛で、身長は推定１８５ｃｍと大柄。ネクタイ姿をビシッと決めた我が聖フィロソフィー学園・・・

「サンジェルマン理事長・・・」

「・・・　・・・」

私達3人を睨み付けている。いや・・・　私を睨み付けてる？

「廊下で騒がないように。部室に入るか、静かに廊下を歩きなさい」

目つきは鋭いけど、優しい口調で注意する。

「すいません・・・」

頭を下げた私。後ろの2人も、一応頭を下げている。

「仲がいいのは良いことだが・・・
君達は今朝早くも・・・校舎の屋上ではしゃいでいたね？」

「え？」

「はわ？」

「え～？」

私達は同時に、疑問の声をあげた。

「僕たち、朝は一緒じゃないですよ？」

「そうです～。デカちゃんは今日、遅刻しました～！」

いや・・・だからそれ、胸をはって言える事か？　しかも理事長の前で？

「そ、そうです。私達は今日、倶楽部で初めて顔を合わせました」

「・・・　・・・・」

理事長の眉がつりあがる。

「そうか・・・。失礼。人違いだったようだ。
まぁ、とにかく。はしゃぐ時は、場所をわきまえて」

「は、はい！　失礼します！」

私は横にいた2人の袖を引っ張り、その場から立ち去った。

「僕たち、誰と勘違いされたんだろうね～？」

「デカちゃんも気になります～」

「・・・　・・・・」

チラッと後ろを見ると・・・理事長が、こちらをジッと睨み付けたままだった。

「理事長・・・

ロリコンかしら・・・？」

女子高生を見つめ続けるって事は、その可能性も否定できないってわけよね？

「わ。理事長、ずっとピタ子見てるよ。
ひょっとして、興味あるんじゃないの？」

部長が私の背中をポンと叩く。

「可能性アリです～。だからあんな作り話を言って、気を引いたんです～」

「まさか・・・・」

再び後ろを振り返ると、彼が物理倶楽部に入っていくのが見えた。

「・・・・　・・・・」

確か理事長・・・・　化学の先生だったはずだけど？　何故、物理倶楽部へ？

サンジェルマン理事長の事をちょっと気にしながらも・・・・

私達3人は、学校を出ようと1階へ降りていった。

（第7話へ続く）

第6話　ソーカルちゃんと理事長（後書き）

〜〜〜

第7話　万物の根源（アルケー）（前書き）

～～～

第7話　万物の根源（アルケー）

一介の化学教師だったサンジェルマン先生は、ある日偉大な化学の実験に成功した。くわしくは知らないけど、人はそれを【錬金術】と言うんだって。そのおかげでサンジェルマン先生は超のつくお金持ちになったらしい。

そして私立学校として経営の危機だった聖フィロソフィー学園を立て直すため、理事長に就任したのが数年前。彼のおかげで廃校の危機を免れた本校・・・最近、共学になったのもサンジェルマン理事長の発案だったそうだ。

まぁ私的には、ルブラン君と運命の出会いをしたのだから（遠くから見つめるだけで、喋った事ないんだけどね）・・・サンジェルマン理事長様々って感じよね。

そんな聖フィロソフィー学園・・・通称「テツ学」。放課後の廊下を歩くと、色々な連中と遭遇する。今、私達は玄関に向かうため、1階の【古代組】の前を通っているが・・・

「万物の根源（アルケー）は・・・水ですわ」

「いやいや、火だっぺよ！！」

「原子（アトム）だっちゃ！」

そこでは毎日、万物の根源・・・すなわちアルケー探しのディスカッションが行われている。

「水はどんな形にもなれるのよ。それに生命の起源は水にあり。
もっとも万物の根源にふさわしいのは・・・　水ですわ」

まるでネグリジェのようなスケスケの服装で・・・おっぱいも大きいタレスちゃん。

「それなら火だって、形を変えられるっぺよ！」

魔法使いのような出で立ちのヘラクレイトスちゃん。

「いやいや。原子（アトム）の結合次第では、どんな形にもなれるっちゃ・・・」

巫女のように可愛らしい姿のデモクリトスちゃん。万物の根源（アルケー）について語りあうこの3人の輪の中に

「デカちゃん的には・・・全て疑わしい！
つまりあなた達は・・・」

デカルトちゃんが乱入した。

「あら、デカルトちゃん。今度は私と・・・勝負するつもり？」

タレスちゃんがけんか腰に言葉を投げつける。

「はわ？」

首をかしげるデカルトちゃん。その横にいたラッセルちゃんと、タレスちゃんの目が合った。

「！？」

瞬間、タレスちゃんは・・・両手で胸を抑える。あれ？　ブラジャーつけてないよね？

「部長、タレスちゃんのブラ・・・取った？」

「あのさ、ピタ子。僕が見境無く人のブラ、取ったりするように見える？」

見える。

「タレスちゃん・・・　普段から、ノーブラだったっけ？」

「だから僕、彼女のブラなんか取ってないし」

明らかに警戒心むき出しのタレスちゃんは、部長に声をかける。

「あんた・・・　もう、十分でしょ？　さっさと行きなさいよ・・・」

タレスちゃん・・・部長が苦手みたい。過去、何かあったのだろうか？

「部長・・・タレスちゃんを襲ったんじゃないの？」

「まさか。僕がそんな事をするように・・・」

見える！

「まぁ、あの豊満な生乳・・・　揉んでみたいけどさ。
僕にだって理性があるよ」

人のブラはずしまくった前科数犯のエロオヤジに・・・理性なんてあるのか？

「いい？　デカちゃん的には～」

デカルトちゃんは、３人を交互に指さし・・・

「絶対的な何かを探すには・・・
あなたたち、【萌え】が足りないわ！！」

ドヤ顔で言ってのける。

「あなたの言う【萌え】だって、水じゃないの～！？」

「いやいや・・・火だっぺお！」

「だから、原子（アトム）だっちゃ・・・」

彼女たちには通じない。

「我思う、ゆえに我萌え～！　それだけが唯一の真実！！」

「あの・・・」

熱く語るデカルトちゃんに、背中から声をかける人物がいた。

「あの・・・　絶対壊れない・・・イデアの世界について語らない

？」

まためんどくさいのが現れた。時間が気になる私はデカルトちゃんの腕を掴み、ディスカッションの輪から引きずり出す。

「プラトンちゃん、ごめんね～。
私達、ちょっと用事があるの」

ヒラヒラのスカートに三角形のアクセサリーをつけたプラトンちゃん。

「ほら、デカルトちゃん。行くわよ！」

プラトンちゃんに背を向け

「イデア・・・」

「水・・・」

「火・・・」

「原子（アトム）・・・」

背後に、古代組の白熱ディスカッションを聞きながら・・・

「はわわ～　萌えです～」

後ろ髪引かれるデカルトちゃんの背中を押し、私達は靴箱へと向かった。

「僕的にはさ～」

ディスカッションを遠目に見守っていた部長が、口を開く。

「デモクリトリスちゃんは、なかなか・・・」

「デモクリトスちゃん！！」

油断するとベクトルが変態の方を向く部長。

「そうそう。デモクリトスちゃんね。
万物の根源（アルケー）が原子（アトム）・・・

なかなか確信ついてると思うな～」

「・・・　・・・」

以前はよく・・・私も、アルケーディスカッションに参加していた。

【万物の根源（アルケー）は、数である！】

これが私の持論。だけど、私のファンクラブ【ピタゴラス教団】の人以外・・・ほとんどこの意見に耳を貸さないのよね。

「数って何ですの？」

「見えないし！　書かないと見えないし！」

「そんなものが、万物の根源（アルケー）っちゃ？

ちゃんちゃらおかしいっちゃっちゃ！」

みな自分の主張こそが正しいと思ってる。まぁ、そういう私もそうなんだけど・・・。

「でもピタ子も、なかなかいいセンいってるよ」

部長は私の意見を褒めてくれる。教団以外の子では、唯一の人物だ。

「聖メンデレーエフ学園の子達と合コンした時さ。
元素は番号がついてる。つまり数字と元素は対応してるのよ」

合コン？

「それに僕たちがいる場所だって、座標系で数値表現できる」

「は～い！　座標はデカちゃんが発明しました～！」

「デカ子の発明は、直交座標。色んな座標系あるけど・・・
やっぱり最初の座標系を創始したのは偉いね、うん」

部長が言うには・・・例えば北緯何度、東経何度、高さ何mとかでこの地球上の【位置】は全て【数字】で表現できるという。さらには、その位置にある物質も全て元素レベルで考える事が出き、それら元素も数字が対応しているという。

「あとは質量なんかも、全て数値表現できるしね。
この世に存在する物は、数字で表現可能。例え見えなくても・・・」

「見えなくても？」

「例えばブラックホール。
光ものみこむわけだから、直接観測されたワケじゃない。
X線など電波の観測数値を元に、位置を特定しているんだ。
つまり数字だけが、見えないブラックホールの存在を主張しているのよ」

部長曰く・・・数字があれば、その物が存在している位置や材質、質量や大きさなど全て表現できる。例え私達の目で見えなくても。
つまり全ての物の存在は、数字に還元できる・・・

「僕は、【全て】とは言ってないよ」

これ以上は【存在論】という哲学の深いところまで発展する事になるので・・・その話はまたいつか。

「だからピタ子。万物の根源（アルケー）は数字・・・
正解とは断言できないけど、いいと思うよ。マジで」

「でも、数字の世界も疑う余地はあるでしょ～」

デカルトちゃんの哲学は全てを疑う事から始まる。

「待ってよ、デカルトちゃん。例えば座標系も疑えるって事？」

「もちろんです～」

「そんな事言ったら、デカ子。
君が開発したデカルト座標も、正しくないって事になるよ？」
「だからデカちゃん、言ってるじゃない～。
萌えの私だけが、唯一正しいの！
その私が考えた座標系は正しい・・・　はわ？
でもさっき、疑う余地があるって言っちゃったし・・・」
「ほら、パラドックスに陥った」
嬉しそうに部長が言い放つ。

そう・・・
私達は毎日・・・　こんな話し合いをしている。
ある者は、物質とは何かについて研究し・・・
ある者は、生きる意義は何かと考える・・・
ある者は、正義とは何かを語り・・・
そしてある者は、知識とは何かを追求する・・・
何も知らないという事さえ、【知】だという人もいる。
「【ムチの血】ってヤツでしょ！
興奮するね～　ラッセル～　ラッセル～♪」

「違います～。【無知の知】です～！」

「・・・　・・・・」

「おろ？　いつも真っ先にツッコミ入れるのはピタ子なのに・・・
放置プレイ？」

「いや・・・　私も1つ、【知】を得たわ」

「何です～？」

「【ベタなエロオヤジギャグは、殺意を芽生えさせる】」

「あ～。僕もそれ、わかる！！　すっごい、よくわかる！」

こいつはわかってない。

「・・・　・・・・」

部長の邪魔が入っちゃった。話を戻そう。

私達【人】はどこから来て、どこへ向かっているのか・・・

その存在意義とは何か？

何故、私達は感情があるのか？　愛とは何か？　生きるとは？

それらについて考える事は全て【哲学】の対象だ。

そして多くの哲学者は・・・それら思考の先にある、大きなテーマにぶちあたる事になる。

それは・・・【神の存在】。

【現代組】では【大統一理論】や【ビッグバン】、【インフレーション理論】や【超ひも理論】など、最新の科学や数学を学んでいるらしいが・・・

実のところ、それらの根本は不確実なのである。

結局行きつく先は、それら全ての源（みなもと）。おそらく【絶対的な何か】・・・多くの人はそれを【神】と表現する。そしてその存在を認めなければならないのかという議論になる。

【神】の定義とは何か？　【神】の存在をどう証明するのか？　そもそもこの世の起源は【神】でしか語れないのか？

現代組の天才児と言われるニーチェちゃんは

【神。お前はもう、死んでいる】

という言葉で、一躍（いちやく）時の人になった。これは【神は存在していたが、すでに死んだ】という意味ではない。彼女の言う【神】とは、絶対的な象徴・・・例えば【神】もそうだが、【真理】や【善】なども それにあたる。それらはもはや無価値である・・・という彼女の主張を表したのが、上の言葉だ。

しかし彼女とて・・・

神が存在しない事を証明したわけではない。
この先、万人が納得する【答】が見つかるのかどうか・・・今のとこ、誰にもわからない。

「・・・　・・・・」

今の私はそれよりも・・・

「さ。ようやく学園の外に出たわ。
ポール公園に向かうわよ～」

恋敵（ライバル）が誰なのか・・・それにしか興味がない。そして無価値かもしれない【愛】のため・・・

その子の前に立ちはだかってやる。

「公園、見えてきたです～」

「青空教室ってのも、アリだわ。
部長として週一ぐらい、公園で部活ってのも考えようかな」

「・・・　・・・・」

もうすぐ目的地に到着する私達。

・・・　・・・・。

ちょうどその頃。

理事長室では、私達の想像を超えた【物】が運ばれていた。

「じゃ、ここにサインお願いします」

「・・・　・・・・」

サンジェルマン理事長は、無言で宅配業者の差し出した用紙にサインする。

「では、失礼します」

業者が部屋を出ると・・・　目の前にある、段ボールを見つめた。

１辺約１．５ｍの、大きな立方体の段ボールだ。

「これが・・・・」

その段ボールを、右手でさすりながら

「これが・・・

【神】の贈り物か・・・・」

理事長はそう呟いた。

（第８話へ続く）

第7話　万物の根源（アルケー）（後書き）

～～～

第8話　謎のメッセージ（前書き）

～～～

第8話　謎のメッセージ

ブラパラごっこに巻き込まれたり、ソーカルちゃんとぶつかったり・・・アルケーディスカッションに（デカルトちゃんが）プチ参加したり・・・

結局、ポール公園についたのは午後5時5分。

手紙の主は5時12分までに、トイレ近くのベンチに座っているはず。この公園にトイレは1つ。そしてその前にあるベンチも1つしかない。

「ベンチには、誰も座っていないです～」

「トイレとベンチは、完全に1対1対応。
つまりあのベンチに手紙の主は来る・・・

名探偵ラッセル～　ラッセル～♪」

部長が張り切っている。

「デカちゃん達、どこにいておきますか～？」

「・・・　・・・」

しばらく考えた私。

「あそこしかないわね」

私達はトイレの中・・・一番奥の個室に3人で潜り込んだ。

「わお～。個室に3P！？　ラッセル～　ラッセル～♪」

こらこら！

「これは18禁小説じゃないの！
そういう発言は禁止！！」

「【P】は【philosopher】（哲学者）の【P】だよ！
ピタ子、何エロい事考えてんの～？」

嬉しそうな部長。

「う・・・」

そして言葉に詰まる私。

「でも、みんなでトイレに入るなんて～
デカちゃんも、ちょっとドキドキです～」

「デカルトちゃんまで・・・」

他の個室には窓がない。だけどこの奥の個室だけは、小さな曇りガラスの窓がある。その窓をちょこっと開けると、あのベンチが見えるのだ。

私達3人は狭い個室で身を寄せ合いながら、その時を待つ。

午後5時１０分。

「僕、おしっこしていい？」

「ダメ！」

「僕、緊張するとおしっこしたくなるんだけど・・・」

知らないって。

「デ、デカちゃんも・・・その・・・　おしっこしたいです～」

「えぇ！？」

溜息をつく私。

「じゃぁ別の個室行って、用を足してきてよ・・・」

「ほ～い」

「は～い」

２人が個室を出て行ったその時・・・

「は！？」

あのベンチに・・・

「誰！？」

何者かが歩み寄っていくのが見えた。背は私と同じぐらい。ブカブカの帽子を深くかぶり、大きすぎる黒いコートを着けている。

「あれじゃ・・・」

その子はトイレに背を向ける角度で歩いてきて、ベンチにちょこんと座った。

「誰かわからない」

迷ってる暇はない。私はすぐに個室を出ると、トイレの外に出た。

「・・・　・・・・」

ベンチの方を見ると、その子が走り去っている姿が見える。

「く・・・」

私はすぐに彼女を追いかけようとした。どうしても・・・

「あの子は・・・？」

その子の正体を知りたい。だけど・・・

「！？」

ベンチの前を通り過ぎようとしたとき

【ピタゴラスに告ぐ】

そう書かれた手紙が、ベンチの上に置かれているのが目に入った。

「・・・　・・・・」

走り去るあの子と、その手紙・・・交互に目をやる私。追いかけたいけど、手紙も気になる。

結局手紙から目を離せない私は、必然的に歩(ほ)が止まった。それを手に取り、裏返す。

【ｆｒｏｍ　Ｕ】

そう書かれていた。

「フロム・・・　ユー・・・？」

顔を上げると・・・　すでにあの人物の姿はない。

「・・・　・・・・」

「ピタ子～！」

「いつの間に、ベンチに行ったんですか～？」

2人が仲良く、トイレから出てくる。

「ピタ子、誰かきたの？」

「う、うん・・・」

「誰だったんですか～？　気になります～」
私は首を横に振った。
「私がここに来たら、すぐ逃げていった。
帽子を深くかぶって、コート姿で・・・
いったい誰なのか・・・」
「え～？　じゃ、ピタ子・・・
結局、わからないまま？」
「うん・・・」
「はわ？」
デカルトちゃんが、私の手に握られた手紙に気づく。
「それ、何です～？」
「これは・・・」
2人の前に、私は【ｆｒｏｍ　Ｕ】の手紙を見せた。
「はわわ？　フロム・・・ユー？」
「表は？」
手紙をひっくり返す私。

【ピタゴラスに告ぐ】

「ピタ子に告ぐ？　何、コレ？」

「さぁ？」

「デカちゃんは～　中を見てみたいです～」

「まぁ、まぁ。まずはピタ子から見なよ」

「う、うん・・・」

私は封を切って、中を取りだした。便せんが1枚あるだけだ。

「・・・　・・・」

たった1行だけ、そこには書かれてあった。

「どう？　ピタ子？」

「何、書かれているんです～？」

「うん・・・」

見せても問題ないと判断した私は、便せんを広げて2人に見せた。

【これ以上、ルブラン君に関わらないで。邪魔なのよ！】

「お～。いいね～。ライバル心、伝わる！

有界閉集合でいて挑戦的・・・僕、こういうの好きよ～」

「はわわ～　ルブラン君をめぐって、恋の三角関係勃発です～」
「ちょっと2人とも・・・　大事な事忘れてるわよ！」
そう。この手紙は・・・
「大丈夫、言わなくてもわかってるよ。
この手紙のパラドックスをね」
明らかな矛盾を含んでいる。
「えぇ？　デカちゃん、何が矛盾なのかわかんないです～」
「コレ書いた人の立場になれば、すぐわかるよ」
さすがは部長。
「このピタ子に宛てた手紙は・・・
ピタ子がルブラン君に関わろうとしていた事を知っている。
しかも、今、ここにピタ子が現れる事も知っていた」
それだけじゃない。この【U】は私に挑戦的な手紙をあてている・・・って事は、ルブラン君がここに来ない事も知っていた？
「はわわ～　やっぱりデカちゃん、わかんないです～」
「【ピタ子がここに現れるのをどこで知ったの？】って事さ。
だって、この公園に来ようってなったのは・・・

ついさっきでしょ？」

「あ～！！　わかったです～！
デカちゃん達がここに来るのを決めたのは～　ついさっきなのに～

この手紙書いた人は～　ここに来るのを知っていた～
おかしいです～」

「はい、デカ子！　繰り返しの説明、ありがとさん」

「おかしいわ。ありえるの？
コレを書いた人・・・　まるで未来を知ってたみたい」

「まぁ焦らず。最初から整理しよう。
まずは・・・この公園に来ようと言ったデカ子が疑われるわね」

「はわ？　デカちゃんが！？」

私がトイレの個室からベンチを見ていた時・・・デカルトちゃんも部長も、私の側にはいなかった。

「でも僕は、デカ子がおしっこする【音】を聞いていた。
その間に、何者かがこの手紙をベンチに置いているから・・・
デカ子はアリバイある。シロね！」

「・・・　・・・・」

「きゃ～！　デカちゃんのおしっこ・・・聞いてたですか～！？」

「ラッセル！」

らっせる？　皮肉にも部長のセクハラ行為が・・・デカルトちゃんの無実を証明した。

「そのデカ子と一緒にトイレから出てきた僕も・・・当然シロ」

そう言うと部長は私をじっと見る。

「え？　まさか私・・・疑われてる？」

「可能性の問題。否定はできないってヤツね」

「ちょ、ちょっと待ってよ。

デカルトちゃんが公園に行こうと言ってから・・・

私達、ずっと一緒だったじゃない。こんな手紙を書く時間なんてないわよ」

「ちっちっち！」

部長は人差し指を左右にふった。

【これ以上、ルブラン君に関わらないで。邪魔なのよ！】

「ほら、この手紙の内容。別に公園を示唆してるわけでもないし・・・

・

あらかじめピタ子が用意しておいて、今、そのベンチに置いた。

その可能性もあるって事よ」

「はわわ～　自作自演です～」

「え～！　じゃぁ私、嘘言ったって事じゃん！」

「ブラサイズを【C】って言ったのも嘘だったじゃん」

「そ、それとこれとは・・・」

「まぁ、あくまでも可能性って事よ。
真実を追究したければ、あらゆる可能性を考えなきゃね。

それが僕達、哲学者の務めなんだからさ」

「・・・　・・・」

なんていうか・・・。部長にはいつも、うま～く言いくるめられているような気がする。

「大丈夫。今んとこ、僕はピタ子が【U】だと思って無いから。
じゃぁ次は、ここにいない人物の可能性を考えましょう。

ピタ子が見た子って？　どんな感じだった？」

「誰なんだろう？　あっという間に逃げていったけど・・・」

「もっと情報無いの？　身長とか、おっぱいの大きさとか？」

「身長は・・・私と同じぐらいだったかな？
コート着けてたから、おっぱいはわからないけど。
それと・・・」
私は見た。あの子が立ち去る時、コートの裾(すそ)から
「何か、角張ったものが見えた。コレみたいな・・・」
髪の毛につけた三角定木のアクセサリーを2人に見せる。
「・・・　・・・」
部長がじっと定木を見つめた。なんだか私が【U】っていう可能性を増やしたような気もするけど・・・
「プラトンちゃんかな？　数学倶楽部だし・・・
それに彼女。そういうアクセ、持ってるわよ」
「プラトンちゃん・・・」
私と同じ【古代組】の子。いつも隣のソクラテスちゃんのために、必死にノートを取っている。ソクラテスちゃんは、ノートを一切取らない子で有名。なんでもプラトンちゃんは、ソクラテスちゃんをかなりリスペクトしているとか？
「でも～　プラトンちゃんは～　デカちゃん達が学校出る時～
ずっと校内にいた感じだったです～」
そうだ。

「確かに。私、同じクラスだけど・・・
放課後はいつも、ソクラテスちゃんの後ろをついていったり・・・
イデアイデアと言って、校内で誰かとディスカッションしてる。
今日みたいにね。外に出るのは登下校の時だけ・・・」

「プラトンちゃんはシロです～」

「う～ん。数学倶楽部で、ピタ子とプラトンちゃん以外で・・・
角張った小物持った子、他にいたかな～？」

「ここは・・・テツ学の生徒全員を、捜査対象にするべきかもです～」

「私と同じぐらいの背で、角張ったアクセを持った子・・・」

「デカちゃん的には～　Pちゃんが見たのは～
Pちゃん自身～　って感じです～」

「話を総合するとそんな感じするよね～。
とうとうピタ子も・・・

僕みたいに、パラドキシカルな子になっちゃった？」

「はわわ～　デカちゃんもパラドキシカルなのに・・・
Pちゃんも仲間入りですか～？」

いや・・・　何、言ってんの？

「おぉ！　パラドキシカル！
３人ともパラドキシカルで３Ｐ！！」
ケラケラと笑う２人を横目に、今一度私はその便せんを見つめた。
【これ以上、ルブラン君に関わらないで。邪魔なのよ！】
手紙の主が私？
「冗談。こんな手紙なんか、書いた事ないし！」
何よりも・・・　この手紙書いた人物は、私の性格を全くわかってない。
「【邪魔するな】なんて言われたら、邪魔したくなるのが私よ！」
「うわ・・・ピタ子、なんかイメージ悪！」
「でもデカちゃんは～　Ｐちゃんの事、好きです～」
「いや・・・　そんなフォローしたら・・・
ホントに私、性格悪いみたいじゃん」
愛しのルブラン君に関わらないで？　それは私にとって、関わりなさいって言ってる事と同値だ。
「はい！　デカちゃん、１つ気づきました！
この【ｆｒｏｍ　Ｕ】！

【U】から始まる子を探せばいいと思いま～す！」

「【U】か・・・　僕の記憶では、【U】から始まる生徒・・・
テツ学には、1人もいないわ」

「あ、ホラ。
部長と同じクラスに【ウィトゲンシュタイン】ちゃんがいたでしょ？

あの子、イニシャル【U】じゃない？」

「ううん。彼女は【U】でなくって、【W】から始まるよ」

「デカちゃんの記憶にも、【U】から始まる子って・・・
あの学校にはいないです～」

「【U】から始まる子はいない。なら、この【U】はいったい・・・？」

言いながら、部長が【U】を睨み付ける。

「・・・　・・・・」

しばらく考えていた部長が、口を開いた。

「ユニオンかも・・・」

「ユニオン？」

「うん。集合で【Π】はインターセクションだったでしょ？

【∪】はユニオンを表したじゃん」

一昨日、部長から習ったヤツだ。

「集合論は、現代の論理学とも密接に繋がっている。
僕たち哲学者が真なる何かを見つけようとしたら・・・
それを証明する道具が必要でしょ？　集合論もその道具の１つってわけ」

という部長の信念の元、私達は集合論を学んでいるけど

「ユニオンか～　う～ん・・・」

果たしてこの【∪】は、ユニオンなのか？

「最初ピタ子が見つけた【ｆｒｏｍ　Ⅱ】。
そして今回は【ｆｒｏｍ　∪】。

２つの手紙の主は、同一人物とみて間違いなさそうね」

私も同一犯という意見に賛成だ。

「最初が【インターセクション】。次が【ユニオン】を表しているなら・・・」

表しているなら？

「手紙の主は集合論を知っている人物。
そして集合論は【現代組】しか習わない。

つまりこの手紙の主は・・・
僕と同じ【現代組】の子の可能性が高いわね」

「・・・　・・・」

エロセクハラオヤジではあるけれど・・・【現代組】ゆえの豊富な知識、それに説明のうまさ、何より洞察力の深さ。やっぱり【数学倶楽部】の部長として適任だなと思わされる。

部長の言う通り。【Π】と【U】が集合論の記号を表しているのだとすれば・・・

「【犯人】は【現代組】の子・・・」

この時の私は、意外な犯人の正体に気づくはずもなかった。

（第９話へ続く）

第8話　謎のメッセージ（後書き）

〜〜〜

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1365z/

ピタゴラスちゃんのジレンマ

2011年12月8日01時52分発行